

つけられた現実と共産主義社会の理想とは反対なことばかりであったような気がする。ソ連という国を理想化している人たちにはわからないと思う。

当時ソ連は戦争の痛手を負っていて、生活物資と共に若いソ連の男性が不足し、独ソ戦で戦死した夫を持つ未亡人が多く、傷痍軍人も多く見られた。これがため満州からあらゆる物資を根こそぎ持ち去っている。抑留中日本のレコードを聞いてハッとしたり、日本の日用品がソ連の至るところで使用されていた。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十二年一月十五日

現住所 岩手県二戸市石切所字枋ノ木

学歴 旧制中学卒業

入隊前職歴 昭和十六年四月一日、国鉄盛岡管理部盛

岡駅車号係

入隊部隊 盛岡の騎兵二十四連隊が満州の八〇七部

隊となり満州国東安省宝清で入隊、動員

命令下りソ満国境の饒河に移駐、国境警

備隊歩兵に編入

ソ軍侵攻

貫通銃創二回、抑留地ウズベック共和国・カザック共和国・トルクメン共和国

復員

昭和二十三年七月十一日、朝嵐丸にてナホトカ港より舞鶴港に上陸

帰国後職歴

昭和二十三年十一月二十五日、二戸税務署に奉職

役職

全国戦後強制抑留補償要求推進協議会岩手県理事、二戸分会事務局長、町内会

長、納税組合長

(岩手県 田辺 壮久)

我が青春 出征からダモイ

千葉県 椎名 帯刀

はしがき

昨年の暮れに高橋孝之さんが訪れて、終戦五十周年を迎え、同志の抑留生活について記憶をたどって書いて

てみてくれと頼まれて、乱筆ながら思い出をつづつてみました。

高橋さんとは昭和二十四（一九四九）年九月一日に山澄丸で復員して、同じ列車で横芝駅で皆さんの出迎えを受けて異国の丘で夢みた故郷の地を踏み、万感胸に迫り、喜びの涙で声も出なかった。高橋さんとは今後の親交を約し、我が家の人となった。以来、兄弟のように交際して毎日楽しく余生を送っております。

昭和十二年、徴兵検査で第一補充兵となった。

七月七日、北京郊外蘆溝橋ロウキョウキョウにて銃声一発、次第に戦禍が拡大して日支事変となった。

昭和十三年二月二十五日午後八時、役場兵事主任が赤紙を届けに来て、出征おめでとうと言われる。当時は兵隊に出なければ男でないと思われていたので、連日親戚への挨拶回り。

三月一日、村民の見送りを受け、「祝出征」のたすきをかけて、「勝ってくるぞと勇ましく」の軍歌の声に送られて横芝駅で乗車し、佐倉五十七連隊に入隊、

宿舎生活。三月十日陸軍記念日、小雪降りしきる中を新装甲の軍服、銃装備にて、官民多数に見送られ軍用列車で一路出征の途につき、途中宇治港に一泊、御用船にて玄界灘も無事大連港に入港し、一路北京に向かう。

三月十九日、北京到着。初めて見る異国風景、まるで夢の国にきたようだ。支那駐屯歩兵第一連隊本部北京清華大学に到着した。

夕方中隊編成を終わり、赤き夕陽に照らされて、中隊警備地、北京西方、南口の東方温泉村にトラックで輸送されて、戦友の真心こめた歓迎を受け久しぶりに軍装を解き、ここで一期検閲まで教育が始まった。

六月二十日、房山県城警備、討伐戦に初めて参戦した。

七月二十九日（晴）

漢口攻略作戦に出動大命が下令され、午前四時起床ラッパ。夢破られ、軍装りりしく、冷気身にしみ入緊張し、軍旗を先頭に清華園より軍用列車に乗車、住み慣れた北京を出発。

一路ターター港に到着、御用船バタバ丸（六千トン）に乗り込み、一路揚子江を上り、雄大なる流れに驚いた。御用船の中は暑さ灼熱地獄。裸体の勇士たちが甲板に上り、三々五々集まり、明日の功名を夢見て楽しき語らいに夕日の落ちるのも忘れて語り合っている。

船は夜間は敵の魚雷、砲戦が危険なため進行せず、船内勤務は暑さかなわず、早く上陸したくなった。

夜の上海、戦後間もないが電燈が輝いていたのは驚き。内地の港に入るような気がした。

八月八日（晴）

船内勤務一週間、暑さのために相当軍馬の事故死が出た。

昨夜南京沖に碇泊して、朝から編成順に上陸開始。朝食をすませ、昼食を飯盒に詰めて軍装を整え、午前八時ラッパ一声にて上陸開始し、港の前広場に集結、昼食を取る。落城南京の姿、どこに行っても兵隊ばかり。所々に軍酒保が設けられてあった。糧秣の山には驚いた。銚子ヤマサ醤油の山を見て、久しぶりで内地

を思い出した。

宿舎は読売新聞社の隣の二階建て別荘風の家屋。

奥地に進み、今日は湖口沖に碇泊。

鄱陽湖に入り停留す。御用船数隻が碇泊している。

彼方には不法爆撃により撃沈された病院船が船腹を横たえていた。

八月三十一日（晴）

十一時半昼食を終わりに、上陸開始。モーター船に乗り移りて、軍旗を先頭に上陸だ。ここは二週間前に飯塚部隊が敵前上陸を敢行した激戦地。まだ時々砲声が聞こえてくる。

毎日山また山の追撃戦。連日悪戦苦闘し、奥漢線を爆破して敵の退路を遮断し、漢口に突入し掃討作戦を終わりに、北支唐山に帰営駐屯、鉄道警備。

昭和十五年六月、四国松山二十二連隊に帰国。同月二十日召集解除となり、凱戦勇士の出迎えを受け、夢に見ていた我が家に帰り、家族の無事な顔を見て、今までの苦勞も消え失せた。

昭和十八年五月二十九日、再度応召。東部第七部隊

に入隊、郡山にて独歩第一三七大隊（有馬部隊）第一中隊に編入。

六月、郡山―下関―釜山―保定着。保定地区の鉄道警備。河南作戦洛陽攻略に参戦。

昭和二十年六月、満州国陸軍家屯に移動、野営。毎日対戦車訓練に明け暮れた。

八月二十日、奉天（瀋陽）北陵大学に集結し、終戦。武装解除を受け、二十五日奉天出發。黒河―ブラゴエからシベリア鉄道にて第三十二地区第六分所（ウソリー）に収容された。幸いなことは、他のラーゲルより家があり屋内作業だったので寒さがしのげて助かった。

作業は、地下水をポイラーで炊き塩しぼり、塩を倉庫に搬入、各ポイラーに石炭運搬、炭ガラ捨て（トルコ車で）、雑役、塩の貨車積込み。なかなかノルマ割当が達成できないので、ダバイ、ダバイと牛馬のごとく働かされた。

工場は収容所より千メートル位の所にあつて、第一班八時―四時、第二班は四時―十二時、第三班は十二

時―八時までだった。夏はよかったが、嚴寒の夜間作業は苦しかった。交代の帰りは皆石炭を持ち帰り、ストーブを炊き、燃料にして寒さをしのいでいた。

作業も初めのうちは要領が分からないので苦勞したが、次第に覚えて、ノルマのごまかし作業もできるようになった。食事は一日三百五十グラムの黒パンとジャガイモと野菜のスープだけ。食事分配も皆同じに分配しなければならず、苦勞した。工場の周りの雑草、アカザ、アザミ、タンポポ等の雑草を摘んで塩茹でして食べていた。

冬の作業は、零下十五度以下にならないと休みとならず、工場は無休作業。

夜間の塩の貨車積込みは一定のノルマがあつて、重量ではなく容積で一定の線があり、記されてあつた。なかなか正直にやっついては達成できないので、皆で研究して、積み上げ方法を考へて、中身は固まりで大きくして空洞を作り、容積を大きく積み上げてノルマを達成した。

二十三年ごろ、ウクライナのマダムたちが工場に配

属され雑役作業をするようになり、初めて皆の顔色もよくなってきた。彼女たちは、戦時中ドイツ軍に協力した反共分子として収容されて、各作業所に配分、労働させられたとのことだった。殺風景な作業所も外人の女性と一緒に作業ができ、夢にボタモチ、心の慰めとなった。次第に慣れて、彼らと物々交換してパン昼食できるようになった。

身体検査で栄養失調となり、夏にコルホーズ作業に回されてジャガイモ掘り。工場と異なり、日中八時間作業でノルマがなく、作業は楽しかった。看守の目をごまかして工場から持って来た焼塩で味つけして食べ空腹をしのぎ、体力も回復した。

コルホーズ作業も終わり、第八分所に配属されて、山から石の切出し作業をさせられた。ツルハシとシャベルで切り崩し、一定のノルマに積み上げる。塩工場で覚えた要領で中を空洞にしてノルマを達成していた。

夏は夜十時頃まで外で新聞が読めた。赤旗紙を見て、遙か東の空を眺め故郷を偲び、「異国の丘」を歌

い、互いに慰め合っていた。

昭和二十四年八月にやっとダモイの命令が下り、八月十七日ナホトカに集合。検査を受けて、将校、憲兵、特務機関員、警官等は反共分子として残された。

八月二十九日、ナホトカ港から引揚船「山澄丸」に乗船、日の丸の旗を見た時、涙が止まらなかった。

九月一日、舞鶴港に上陸。検疫を受け、懐かしの故郷の地を踏みしめ、夢のような現実に感激した。

九月六日、引揚げ事務を済ませて、苦勞を共にした戦友と別れて列車で各方面に出発した。

横芝駅で地元の人々の温かい出迎えを受け、我が家に帰り、祖先の霊に報告し、地獄から夢みた楽天の世界に生き帰った。

今はダモイから五十余年、家族もなく独居老人の身となり、町のヘルパーさんの世話になり、異国の丘に眠る戦友の冥福を祈り、余生を送っております。

付記

玄関前に従軍記の碑、居間に銀盃と勲章を額にし、軍装の写真を飾り、毎日、当時を夢んでいます。